



子ども・若者ご縁づくり

Guide

推進ガイドライン

Line



浄土真宗本願寺派
子ども・若者ご縁づくり推進室

目次

— はじめに — ガイドライン作成にあたって(これまでの流れ)	1
---------------------------------------	---

(1)さらなる取り組みのために

■ さらなる取り組みの指針	3
◇ 子ども・若者ご縁づくりとは(理念とねがい)	3
◇ 3つの視点	5
◇ 3つのかたち	8
◇ 子ども・若者ご縁づくりにおける思春期・若者支援について	10

(2)教区・組における推進

■ 子ども・若者ご縁づくり推進体制図	11
■ 教区推進委員会の役割について	12
■ 教区マネージャーの役割について	13
■ 組サポーターの役割について	13

(3)資料編

■ 略年表	14
■ 子ども・若者ご縁づくり推進室設置後の主な事業一覧	17
■ キッズサンガの始まりから、子ども・若者ご縁づくりに至るまで	20
◇ 全寺院「子どものつどい」キッズサンガの願い	21
◇ 2018(平成30)年度からの「子ども・若者ご縁づくり」推進の方向性について 2018(平成30)年『宗報』5月号掲載記事	25
◇ 2019(平成31)年度子ども・若者ご縁づくり活動方針・事業計画書-抜粋-	30

「私たちのちかい」についての親教	31
------------------------	----



— はじめに —

推進ガイドライン作成にあたって(これまでの流れ)

2005(平成17)年8月1日に始まった「親鸞聖人750回大遠忌宗門長期振興計画」(以下「長期計画」)は、基本的な考え方(コンセプト)を、「新たな始まり」～明日の宗門の基盤作り～、その重点目標の一つを「次代を担う『人』の育成」と定め、「青少年教化対策」が掲げられ、その中で、「全寺院『子どものつどい』ーキッズサンガー」(通称:キッズサンガ)が提唱されます。

事業内容は、子どもと寺院および宗門の将来的展望を切り開くため2011(平成23)年度までに、全寺院で「キッズサンガ」の実施をめざすものでした。

そして、「子どもたちに阿弥陀さまとのご縁」を恵まれ、「お寺が子どもの心安らぐ居場所」となることを願い、宗門を構成するすべての人が取り組んでいただきたいとする事業でした。そこには、「阿弥陀さまのお心をすべての人の居場所に」という願いが込められています。また、「私自身」が育てられていく歩みでもあります。

事業が進められていく中で、次のような疑問が寄せられました。

- ① イベント(行事)を重視する傾向にあり、本来の「仏法とのご縁づくり」が軽視されていないか。
- ② お寺が「居場所」となるためには、まずは、日常生活(家庭内)での「ご縁づくり」が大切ではないか。
- ③ 大遠忌法要後においても、また、「長期計画」が終了となっても、継続して取り組むべきものではないか。

これらを課題にし、さらにキッズサンガの取り組みが継続されるよう、2013(平成25)年4月、「キッズサンガ推進ガイドライン」が、中央キッズサンガ推進委員会より初版発行されます。その事務は、宗門長期振興計画推進対策室が担当いたしました。

「キッズサンガ」の提唱より、今年で14年が経過します。当時、小学生だった子どもたちは、中学生・高校生・大学生・社会人へと成長する年を迎えています。

仏法との出遇いの「はじまり」が「つながり」「深まり」になることを願い、2014（平成26）年6月6日、「第25代 専如ご門主 法統継承式」をご勝縁といただき、同年4月、「子ども・若者ご縁づくり推進室」（以下「推進室」）が新設されました。そして、これまで「キッズサンガ」として提唱された事業の全てを受け継ぐこととなります。初版の「ガイドライン」発行から1年後に「推進室」が設置され、「ガイドライン」の周知を、「子ども・若者ご縁づくり」の観点から行った課題を整理し、また、「長期計画」が2015（平成27）年5月31日に終了したことも加え、ここに「子ども・若者ご縁づくり推進ガイドライン」をまとめることとなりました。

専如ご門主は『法統継承に際しての消息』の中に、

「宗門の現況を考えます時、各寺院にご縁のある方々への伝道はもちろんのこと、寺院にご縁のない方々に対して、いかにはたらきかけていくのかを考えることも重要です。本願念仏のご法義は、時代や社会が変化しても変わることがありませんが、ご法義の伝え方は、その変化につれて変わっていかねばならないでしょう。現代という時代において、どのようにしてご法義を伝えていくのか、宗門の英知を結集する必要があります。」

と、お示しになりました。

親鸞聖人ご遷化より、750年を超える年月が過ぎましたが、いまなお、仏法の灯は輝きを失うことはありません。そこには、伝えるもの、承るものの確かなつながりがあるからです。次の世代へその願いをつないでいくのは、仏法とのご縁をいただいたものの役目ではないでしょうか。

ご法義の伝承に向け、この度改訂されました「子ども・若者ご縁づくり推進ガイドライン」が活用されることを願っております。

合 掌

1 さらなる取り組みのために

■ さらなる取り組みの指針

これまでの取り組みでは、2012（平成 24）年 3 月までの取り組み（短期目標）を総括する中で、各教区、各組、各寺院での取り組みの成果や課題が提示されました。それを踏まえ、引き続きキッズサンガ（ご縁づくり）を継続的に推進していくための具体例を含めた方向性と理念を、「キッズサンガとは」「3つの視点」「3つのかたち」として、あらためて整理いたしました。

2014（平成 26）年 4 月に子ども・若者ご縁づくり推進室が設置され、「キッズサンガ」の願い（理念）は「子ども・若者ご縁づくり」に移行いたしました。

これまで各教区等においてさまざまな形でキッズサンガ運動として、取り組んで参りましたが、これら整理したものを指針として引き続き「子ども・若者ご縁づくり」を推進していきたいと思えます。

「子ども・若者ご縁づくりとは(理念とねがい)」

**ご縁のある大人たちが すべての子ども・若者と接点を持ち
子ども・若者とともに 阿弥陀さまのご縁に遇っていこうとすること**

子ども・若者ご縁づくりは『ご縁のある大人たちが すべての子ども・若者と接点を持ち 子ども・若者とともに 阿弥陀さまのご縁に遇っていこうとすること』であり、阿弥陀さまの願いを聞いていくことのできる場、としてのお寺になっていこうとするものです。それはあえていうなら、お寺の本来化への歩みです。

かつては、阿弥陀さまに出会うご縁の多くは家庭によってもたらされていました。しかし現代家庭の多くは「核家族」を通り越し「家族の孤別化」に至りつつあり、おおよそ宗教的伝承は困難な状況にあります。また、それに加えて現代社会はメディアにより、超常現象とか超能力、あるいは靈感・占いやスピリチュアルなどの名の元に垂れ流される宗教とは似て非なる情報が流され、人々はそれらを宗教と受け取ってしまう、いわば「メディアによる伝承」という状況があります。

一方、私たちはそのような現代の状況にありながらも子ども・若者への伝道という視点を見失っていました。たしかに組織教化活動（日曜学校・子ども会あるいはスカ

ウト・仏青活動や幼稚園・保育園)を通して、地道に子ども・若者への伝道を行う活動はありましたが、それが全宗門的な展開となり得ていなかった反省もあります。

子ども・若者ご縁づくり活動を始めたのは、現代社会の子ども・若者たちが、人と人と繋がる経験と実感が得にくい中で、自己肯定感が希薄になり、やり場のない程の孤立感、悩みや不安を抱えている現実を、私たちの課題にしたからに他なりません。

そこで子ども・若者に対して「取りまく状況」と「寺院の在り方」という2つの課題に、どう対処し、どう克服していけばいいのかという視点で起案されたのがキッズサンガでありました。

悩みや問題を抱えている多くの子ども・若者たちに「ひとりではないよ」「阿弥陀さまが一緒してくださっているよ」「お寺はあなたが居ていい場所だよ」と、お寺が「居場所」であることに気づいてもらうため、まずお寺を挙げて、子ども・若者が阿弥陀さまに出遇えるご縁(環境)を作っていこうというものです。

その取り組み方として、まず僧侶と門信徒が力を合わせて、子ども・若者と阿弥陀さまとのご縁づくりの場を創出するために、既存の組織教化活動に学びながらも、今までの青少年教化方法にとらわれずに自由な発想で子ども・若者と積極的に関わるお寺になっていこうと提案をしていくものです。

ですが、新しいカタチの伝道方法とは、今までまったくなかったものを編み出す事だけではなく、今まで行っていることを根底に置きながら「見せ方」「見え方」に時代を反映させ、例えば「異分野と仏教をクロスさせる」ことなどを加える事で、仏教の本質を浮き立たせる方法が必要かもしれません。また、ご縁をつくるための初心者に対応したプログラムの開発も必要です。

阿弥陀様に出遇えるご縁の入口をふやしていくことは、ともにご縁を作る人を増やしていく事でもあります。

「子ども・若者ご縁づくり」の名称は、宗派の次世代育成の取り組み事業名称とし、2007(平成19)年親鸞聖人750回大遠忌法要「宗門長期振興計画」で使い始めた「キッズサンガ」という名称は、その理念を子ども・若者ご縁づくりに引継ぎ、今後は一般寺院や組、教区における子どもへのご縁づくり諸活動の冠名称として普及させていただくことを提案します。

子ども・若者ご縁づくりに取り組むにあたって
忘れないでいてほしいことがあります



「3つの視点」

1.「子ども・若者の今にみ教えを」

子ども・若者の置かれている現状を学びつつ、阿弥陀さまの救いを伝えたい

- 阿弥陀さまの救いはすべての人に願われたものです。子ども・若者たちに、「自分の存在がまるごと受け容れられる場所、すなわち真の依りどころ」があることを、今伝えていくことが最も大切なことです。おつとめ、法話、ゲームなどを通じて、またそれ以外にも、お寺に集う人々のちょっとした声かけや温かな眼差しなどによっても、子ども・若者たちに阿弥陀さまのお心は伝わります。
- いじめ・不登校・家庭の不和・虐待、ネットやゲームへの依存など、子ども・若者たち、それを取り巻く大人、家庭の現状を学ぶことは重要です。人と人がつながる経験と実感が得にくい現代の子ども・若者たちの多くは、自己肯定感が低い、または極端な自己意識の肥大など、学校や家庭の中においてさえ、生きづらさを感じています。子ども・若者と接点を持つ全ての大人たちが、子ども・若者の現実とかけ離れてしまわないためにも、これらの現状を学び続けることが大切です。
- 阿弥陀さまの救いは、学校や家庭内での価値観や世間の常識といったものさしでは、決して量ることのできないものです。私たちは勇気と自信を持って、日常生活の中にあっては身近な一人の子どもに対して、また、子ども・若者に特化した集いなどにおいては一人でも多くの子ども・若者たちに、阿弥陀さまの救いを伝えていきたいものです。



2.「お寺を本来のすがたに」

様々な年代の人々が、み教えとともに集うお寺のあり方をめざす

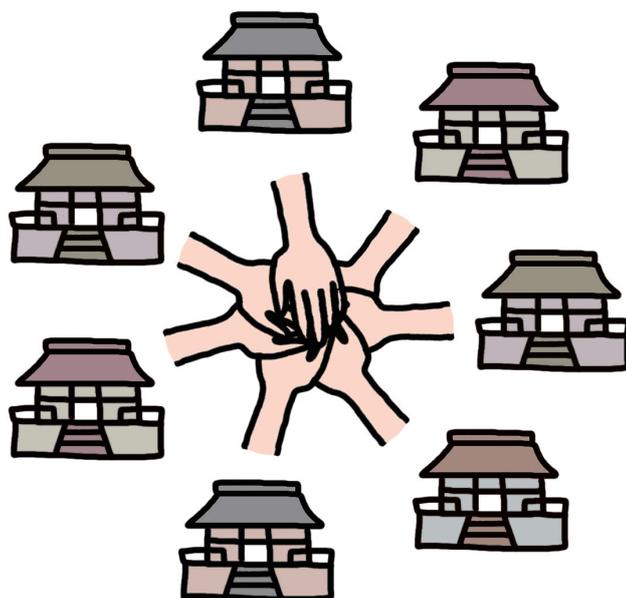
- あらためて、お寺の存在意義とは一体何でしょうか。今日、大多数の人にとって、お寺は、街や村の風景の一部になってしまっているのではないのでしょうか。そこに、「私の人生の確かな依りどころとなるものがある」ということをほとんどの人が実感していないようです。それは、私たちがこのことを、地域や社会に十分伝えてこなかったということに一因があると考えられます。この反省を踏まえ、お寺が広く地域に開かれ、地域と連携する中で、子どもから年配者まで様々な年代の人々が、み教えとともに集うお寺本来のあり方を取り戻す、その営みが子ども・若者ご縁づくりの理念です。
- 急速な少子高齢化と経済の低成長時代において、人々は、これまでの物質的豊かさに代わる、新たなしあわせの価値基準を求めています。その一つのかたちとして、様々な年代の人々が集まり、実際に顔を合わせ、つながっていくことのできる場が、今、求められています。お寺は歴史的には文化の発信地であり、人々の交流の場でありました。あらためて、その歴史を踏まえつつこれからの地域や社会に果たすべき役割、新たな可能性を模索する必要があります。
- 人間そのものを深く問い、人生の根本問題をあきらかにする親鸞聖人のみ教えは、これからますます混迷を深める時代だからこそ、多くの人々の道しるべとなるでしょう。子ども・若者ご縁づくりを通じて、子ども・若者とともに、親世代、年配者、門信徒、地域の方など、全ての方にこのみ教え、阿弥陀さまのご縁に遇っていただける工夫をしていきたいと思います。



3.「お寺どうしが力を合わせて」

組内全寺院が申し合わせをし、各寺院が支え合う

- 子ども・若者ご縁づくりはこれまで「子ども・若者を視野に入れた何らかの教化活動を全寺院あげて取り組んでいく」ことを取り組みとしてきました。その推進は主に「教区」が、それぞれ地域の特性にあったやり方で進めてきました。今後は、この方向性を一歩進め、より現場に近い「組」プロデュース（主導）によって進めていただけたらと思います。具体的には、組内全寺院で企画し申し合わせたものを、組内の各寺院で取り組み、その取り組みにあたって組が各寺院を支援する、というかたちです。
- 「3つのかたち」に示している取組み（1. 日常生活でのご縁づくり、2. 平素の法務、法要、行事でのご縁づくり、3. 子ども・若者に特化した集いでのご縁づくり）も、一寺院だけで単発的に行われたならば、組という地域全体の動きにはなりません。組のそれぞれの寺院全体で行われることによって、お念仏の薫る風土がその地域全体にゆきわたっていきます。
こういった土徳は、決して一寺院だけの活動の成果ではないはずで、あらためて、組内のお寺どうしが力を合わせ、組をあげて子ども・若者にみ教えを伝える子ども・若者ご縁づくりに取り組み、お寺本来の姿をめざしていきましょう。



今一度、子ども・若者ご縁づくりの取り組み方を「3つのかたち」にしてみました。

「3つのかたち」



さらなる取り組みのために

1. 日常生活でのご縁づくり

ご縁ある大人たちが、すべての子ども・若者と接点を持つ機会として最も基本となるのが日常生活です。子どもは、生活の大部分をそれぞれの家庭や地域で過ごし、人生の基礎となる価値観を身につけて若者、大人へと成長していきます。

幼い頃から当たり前のように行ってきた宗教的習慣や生活にあらためて問いを持ち、その中に込められた本当の意味に気づくのは大人になってからかもしれません。しかしながら、子どもの時に身についた宗教的習慣も、阿弥陀さまとのご縁そのものであることを忘れないでおきたいものです。

現代は生活様式の多様化により、宗教的習慣を伝えていくことが大変困難な状況にありますが、そのことを承知しつつも私たちは喫緊の課題として家庭での日常の大切さを見直し、連綿と続けられてきた宗教的習慣が息を吹きかえすような試みに、地道に取り組んでいくことが必要と考えます。



合掌することが習慣になることや、違和感を感じない次世代を育てる手立てとして、具体的には、各家庭へご本尊の安置をお勧めすることや、日々のおつとめ、食前食後のことば、頂きものをお仏壇にお供えする、家庭での仏事（法事など）へお参りすることを奨励する、などの宗教的生活習慣の再普及に組内全寺院をあげて取り組んでいくことが急がれます。

2.平素の法務、法要、行事でのご縁づくり

「子ども・若者ご縁づくりに取り組みたくても、その対象がない」という声をききます。しかし法事などで、子どもたちの姿を見かけることがあります。仏事での参拝者は、すべて「ほとけの子」として積極的に接点を持ち、み教えを伝えていくことが大切です。

お寺の側からすれば平素の法務である葬儀や仏事も、お参りする子どもにとっては、とても珍しい非日常的な経験です。このご縁の中で子どもが受ける仏事全体や僧侶、法話への印象は、私たちが考える以上に心に響いているものです。このような機会をこれまで以上に積極的にとらえ、阿弥陀さまとのご縁づくりのひとつとして展開していくことも可能です。

具体的には、子どもにも配慮した法話、グッズなどの配布、報恩講などの法要に子どもや若者がお参りできるようなプログラムを組み込むなどの活動を、組内寺院で申し合わせ取り組んでいくことが考えられます。

3.子ども・若者に特化した集いでのご縁づくり

先の2つのかたちが「日常生活」や「平素の法務」におけるご縁づくりであるのに対し、「子ども・若者に特化した集いでのご縁づくり」は、子ども・若者にお寺に集ってもらい、様々な行事を行うことです。先の2つのかたちを通じて子ども・若者となりができていれば、集いを実施するときに参加してもらいやすくなりますし、対象に特化した集いが大きな意味をもつと思われれます。

さらに、広く門信徒や地域の方が参画してくださることで、親世代から年配者にいたるまでの様々な方たちがともに阿弥陀さまとのご縁に遇うことができます。

このようなお寺の姿こそが、門信徒とともに地域社会にも開かれているという本来のお寺の姿なのではないでしょうか。具体的には、子ども・若者のつどい、初参式、成人式、結婚式や、サマースクール、土曜学校・日曜学校・子ども会、若者が興味を持つような工夫をした法座・イベントです。規模の大小、人数の多寡にこだわらないこと、広く門信徒とともに取り組むこと、継続的な活動にしていくこと、などが大切な点であると考えます。

「子ども・若者ご縁づくりにおける 思春期・若者支援について」

私たちは、皆それぞれ違った性格や性質を持っているものですが、思春期・若者は、人との違いを「生きづらさ」と感じる場合があります。

昨今、若者の「生きづらさ」は、「居場所の無さ」や「周りとの関係性」、「自己肯定感の低さ」などが指摘されています。

しかしながら、「生きづらさ」はそうした分類だけによって容易に捉えられるものではありません。それらは人や状況に応じて様ざまあり、多くは周囲の無理解によって生じます。そのうえで、私たちにとって大切なことは、「生きづらさ」を定義するよりも、それぞれの「生きづらさ」をそのままに認めていくことではないでしょうか。

浄土真宗本願寺派では 2014 年度より思春期・若者支援部会を設置し、「生きづらさを抱えている若者」の今を常に学びながら悩みに寄り添い、多様性を認め合う関係づくりの一助となることをめざしています。

本部会のおこなっている取り組みは、「一般的な常識の押しつけ」や「こうあるべき」という指導ではありません。上記のような視点を大切にしながら若者支援を、社会に向けて発信していくと同時に宗派内の人々の子ども・若者に対する意識や働きかけに変化を及ぼしていくことを目的としています。



2 教区・組における推進

<全ての現場がご縁づくり>

世代をこえて 子ども・若者へのご縁づくりを推進
ご縁を「つくり」「つなぎ」「深める」

■ 子ども・若者ご縁づくり推進体制図

<組・寺院>

寺院でのご縁づくり推進(住職・坊守・衆徒・寺族・門徒・地域住民の方々)
組内での法要・イベント企画・実施(お寺どうして協力、教化団体協力)

組サポーター (教区により養成、組長と協力)

情報共有

「教区子ども・若者ご縁づくり連絡協議会」
(教区マネージャー、組サポーター、教区子ども・若者ご縁づくり推進委員会委員、青年教化指導員、教化団体代表者、組長、教区事務担当者等)

<教 区>

教区でのご縁づくり推進にかかる「方向性の提案・提示」
教区における法要・イベント企画・実施

教区子ども・若者ご縁づくり推進委員会 (教区独自に委員選定)

教区マネージャー (教務所長により推薦委嘱)

「教区マネージャー・サポーター養成研修会開催」(人材養成)

情報共有

「子ども・若者ご縁づくり中央連絡協議会」
(教区マネージャー代表者、教区事務担当者)

<宗務所>

子ども・若者ご縁づくり推進にかかる「方向性の提案・提示」

総局

子ども・若者ご縁づくり推進室

「ご縁づくり」活動推進会議 (マネージャーにより構成)

子ども・若者ご縁づくり推進委員会

子どもご縁づくり部会、若者ご縁づくり部会、思春期・若者支援部会、情報発信部会

■ 教区推進委員会の役割について

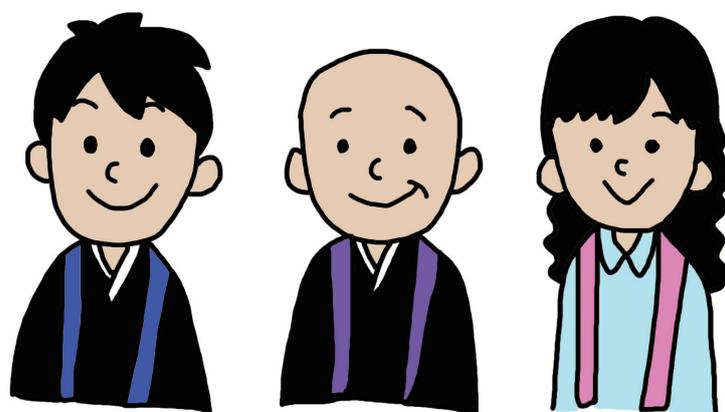
子ども・若者ご縁づくりの現場を全寺院に波及させるために大切なことは、この活動に取り組むお一人おひとりが行動を起こされるところにあります。その支援を積極的に行うために、各教区に教区推進委員会の設置をお願いしてまいり、2019（平成31）年3月31日で全教区に設置されました。

教区推進委員会の主な役割は、

教区主体の事業企画（イベントや研修会など）を行うことで組の活動支援をし、また教区内寺院や組においてご縁づくりに取り組んでもらえるよう環境を整え積極的に働きかけること。

ご縁づくり活動の働きかけは、教化団体の研修会などの場を借りてスタートアップガイドなどを利用し説明することが重要であり、また事業企画を少年連盟及び仏教青年連盟とも連携することにより、教区内にご縁づくりの一体感を出すことができると考えます。

「誰に」対し「何を」「どのように」して「ご縁づくりの現場を増やしていく」のかなどの検討や、教区マネージャーの役割についても今一度確認することが必要ですし、組のサポーターの方々への継続した研修も必須となります。



■ 教区マネージャーの役割について

教区におけるご縁づくり推進のため、次の役割を担います。

- ① 教区内全寺院がそれぞれに取り組むことができる企画、実施、点検評価
- ② 教区で取り組む企画、実施、点検評価
- ③ 各組で取り組む企画の支援
- ④ 教区内の現状把握と分析、課題の共有
- ⑤ 教区内への情報発信と機運づくり
- ⑥ ①～⑤を踏まえた教区推進委員会の「活動方針・事業計画書」の策定

- ・上記の①～⑥までを推進する上で、ご縁づくり推進委員会との連携を密にしてください。
- ・それぞれの教区や組の状況に応じ、自由な発想でご縁づくりを推進してください。
- ・過疎地域むけの企画や、都市部むけの企画など、それぞれに分けても良いでしょう。
- ・計画にあたっては、目標を数値などで示すなどして、かかわる人たちが楽しくモチベーションがあがるような工夫を取り入れるなどすれば良いかもしれません。
- ・企画の参考事例や事業計画書の内容は、子ども・若者ご縁づくり推進室の策定した、「子ども・若者ご縁づくり推進にかかる活動方針・事業計画書」などを参考にしてください。

■ 組サポーターの役割について

組におけるご縁づくり推進の中心的立場で、次の役割を担います。

- ① 組で取り組む企画、実施、点検評価
- ② 組内の現状把握と分析、課題の共有
- ③ 教区マネージャーとの連携

- ・組の状況に応じ、自由な発想でご縁づくりを推進してください。

3 資料編



■ 略年表

2007 (平成19) 年度

- ・宗門長期振興計画推進対策室に「寺院活性化推進部（現在の寺院活性化推進担当）」が新設され、キッズサンガの推進を所掌するとともに、青少年教化対策の具体的施策として策定された「全寺院『子どものつどい』キッズサンガ」を円滑に推進すべく「中央キッズサンガ推進委員会」が設置される。
 - ・各教区（沖縄県宗務特別区含む）に対し、
 - 教区推進委員会における会議・事務通信経費として
 - 組のサポーター養成にかかる
 - 教区内寺院におけるキッズサンガ実施の基盤整備の為に
- ①活動事務助成費
②少年教化サポーター養成研修助成費
③活動助成費
が助成される。

2008 (平成20) 年度

- ・すべての教区（特別区）に「キッズサンガ推進部門」が設置される。

2009 (平成21) 年度

- ・教区推進部門との連携を強固にするため「教区連絡協議会」の実施を全教区に依頼。

2010 (平成22) 年度

- ・親鸞聖人750回大遠忌法要を翌年に控え、「お寺を子どもの居場所に」というキッズサンガの願いの底にある「寺院の役割」を再確認するため、全アドバイザーを対象とした「全アドバイザー会同」を開催。

2011 (平成23) 年度

- ・親鸞聖人750回大遠忌法要「子どものつどい in 本願寺 ～本願寺キッズサンガ・児童念仏奉仕団～」が7月25日～30日の間1泊2日の日程にて3回に亘り行われ、全国から延べ約5,400名の小中学生及び引率者が参加し、運営スタッフは一般公募にて申し込まれた10代から80代までの241名にて組織された。

2012 (平成24) 年度

- ・「短期目標を終えての総括書」を作成、各教区（沖縄県宗務特別区含む）、各アドバイザーへ配布。

2013 (平成25) 年度

- ・「理念」と「運動」の明記。「3つのかたち」「3つの視点」設定。青年教化の意見聴取が始まる。
- ・青年教化推進委員会設置

2014 (平成26) 年度

- ・「子ども・若者ご縁づくり推進室」設置(4月1日)。「宗務の基本方針」に青少年教化活動が取り上げられ、これに重点的に取り組むために、宗門長期振興計画推進対策室が所掌していたキッズサンガを、総局に「子ども・若者ご縁づくり推進室」を特別部門として新設し、これにあたることになった。推進室にマネージャー6名が置かれ、「ご縁づくり」活動推進会議を構成する。
- ・「子ども・若者ご縁づくり基本方針」策定と周知徹底(ご縁づくり説明用パンフレット作成、6月～7月組長研修会での説明)。「子ども・若者ご縁づくり」と青少年教化活動の呼び方を変えたうえで、ご縁づくりの基本方針を「中央キッズサンガ推進委員会」「青年教化推進委員会」の意見を聴取し策定。
- ・第25代専如門主法統継承式厳修(6月6日)
- ・法統継承を機に専如ご門主ご臨席のもと「全アドバイザー会同」を9月に開催し、「子ども・若者ご縁づくり」～キッズサンガをさらに～を展開していくことを確認。
- ・推進室とマネージャーが各教区へ出向し「基本方針の周知徹底」を図る。
- ・推進室が全教化団体と龍谷総合学園の代表者を招聘し「子ども・若者ご縁づくり」基本方針と、若者の現状及び宗門校における宗教教育の現況について研修協議会を開催。今後、情報交流など緊密に取りながら連携を深めていくことを確認。

2015 (平成27) 年度

- ・「ご縁づくり」活動推進会議に、有識者により構成する3部会が設置される(思春期・若者支援部会、企画・事業部会、教材・情報部会)
- ・カルトへの注意喚起パンフレットを龍谷大学総合学園の協力のもと全寺院に配布。
- ・ホームページリニューアル。
- ・「子ども・若者を知るための公開シンポジウム」開催(京都・東京)。
- ・全国高校生「平和を学ぶ集い」in沖縄を開催。8月4日～6日(2泊3日)
- ・仏教プレゼン大会開催(兼中央連絡協議会・10月)

2016 (平成28) 年度

- ・第1期思春期・若者支援コーディネーター養成研修会開催(全3回)。
- ・思春期・若者を知るための公開シンポジウム開催(北海道・東海・福岡)。
- ・現代版「スクール・ナーランダ」vol.1京都、vol.2富山(高岡教区)開催。
- ・全国高校生「平和を学ぶ集い」in沖縄 メンバー再集合開催。
- ・キッズサンガアドバイザーの名称を教区マネージャーに変更。
- ・教区子ども・若者ご縁づくり推進委員会の設置を依頼。

2017 (平成29) 年度

- ・カルト対策についての講演会(大阪教区子ども・若者ご縁づくりサポーター研修会の共催)。
- ・第25代専如門主伝灯奉告法要記念・協賛行事児童念仏奉仕団・子どものつどい～「本願寺 DAYS」～、スクール・ナーランダ特別編、本願寺ギャザリング、ご縁さんエキスポ開催。
- ・現代版寺子屋「スクール・ナーランダ」vol.3東京 開催(3月)。

2018 (平成30) 年度

- ・第2期思春期・若者支援コーディネーター養成研修会開催(前期・1月)。
- ・現代版寺子屋「スクール・ナーランダ」vol.4京都 開催(2月)。

<今後の予定 2019年3月31日現在>

2019 (平成31) 年度

- ・第2期思春期・若者支援コーディネーター養成研修会開催(後期・6月)。
- ・現代版寺子屋「スクール・ナーランダ」vol.5 佐賀 開催。
- ・中高生のつどい開催(3月28～29日)。



■ 子ども・若者ご縁づくり推進室設置後の主な事業一覧

2014 (平成26) 年度

開催日 【会場】	行事名 【テーマまたは内容】	参加者 【スタッフ】
9月10日・11日 【聞法会館】	全アドバイザー会同 【子ども・若者ご縁づくり】	107 【20】
11月4日・5日 【伝道本部】	子ども・若者ご縁づくり中央連絡協議会(1回目) 【子ども・若者ご縁づくり～キッズサンガをさらに～】	64 【20】
12月17日 【聞法会館】	浄土真宗本願寺派 教化団体・龍谷総合学園合同協議会 【子ども・若者ご縁づくり基本方針について】	28 【6】

2015 (平成27) 年度

6月3日 【聞法会館】	思春期・若者を知るための公開シンポジウム(京都) 【イマドキ思春期の悩みとモヤモヤ「生と性と死」から見る関係性のふしぎ発見ー】	379 【6】
8月4日～6日 【沖縄県 ネストホテル那覇】	全国高校生「平和を学ぶ集い」in沖縄 【ヌチドゥータカラ(命どう宝)】	101 【15】
9月30日 【築地本願寺】	思春期・若者を知るための公開シンポジウム(東京) 【イマドキ思春期の悩みとモヤモヤ「生と性と死」から見る関係性のふしぎ発見】	321 【6】
11月10日・11日 【伝道本部】	子ども・若者ご縁づくり中央連絡協議会(2回目) 浄土真宗本願寺派 教化団体・龍谷総合学園合同協議会・仏教 プレゼン大会 【子ども・若者ご縁づくり～ご縁づくりの可能性～】	プレゼン参加者 42 アドバイザー 58 教科団体関係者 18

2016 (平成28) 年度

5月9日～11日 【伝道本部 ・聞法会館】	第1期 思春期・若者支援コーディネーター養成研修会(第1回) 【生きづらさを抱えている若者と関わっている既存の活動体(活動者)などとリンクし、僧侶として活動に取り組む】	39 【6】
6月1日・2日 【伝道本部】	子ども・若者ご縁づくり教区マネージャー代表者 事務担当者研修会(中央連絡協議会 3回目) 【教区マネージャーの役割】	59 【20】
6月6日 【札幌別院】	思春期・若者を知るための公開シンポジウム(北海道教区主催) 【「イマドキ思春期の悩みとモヤモヤ」「生と性と死」から見る関係性のふしぎ発見】	130 【5】

開催日 【会場】	行事名 【テーマまたは内容】	参加者 【スタッフ】
6月20日 【名古屋別院】	思春期・若者を知るための公開シンポジウム(東海教区主催) 【「イマドキ思春期の悩みとモヤモヤ」「生と性と死」から見る 関係性のふしぎ発見】	180 【5】
7月6日・7日 【聞法会館・ 伝道本部】	第1期 思春期・若者支援コーディネーター養成研修会(第2回) 【生きづらさを抱えている若者と関わっている既存の活動体 (活動者)などとリンクし、僧侶として活動に取り組む】	37 【6】
8月6日～8日 【聞法会館】	全国高校生「平和を学ぶ集い」in沖縄 メンバー再集合!! 「第25代専如門主伝灯奉告法要」子ども・若者関連イベント 企画作成&プレゼン大会 【私たちが伝える“命どう宝”】	33 【20】
10月17日 【福岡教堂】	思春期・若者を知るための公開シンポジウム(福岡教区主催) 【「イマドキ思春期の悩みとモヤモヤ」「生と性と死」から見る 関係性のふしぎ発見】	250 【5】
2月4日・5日 【本願寺 伝道院】	現代版寺子屋 スクール・ナーランダvol.1 京都 【わけへだてと共感】	115 【35】
2月8日・9日 【伝道本部】	第1期 思春期・若者支援コーディネーター養成研修会(第3回) 【生きづらさを抱えている若者と関わっている既存の活動体 (活動者)などとリンクし、僧侶として活動に取り組む】	37 【6】
3月4日・5日 【高岡教区 善行寺】	現代版寺子屋 スクール・ナーランダvol.2 富山 【土徳のものづくり】	81 【22】

2017 (平成29) 年度

6月30日 【津村別院】	カルト対策についての講演会(大阪教区子ども・若者ご縁づく りサポーター養成研修会:大阪教区共催) 【若者とカルト ～関係性と依存～】	64 【5】
7月25日・26日 (第1回)【本願寺】	第25代 専如門主 伝灯奉告法要記念・協賛行事 児童念仏奉仕団・子どものつどい～「本願寺DAYS」～ 【ご縁をつくり つなぎ 深める】	782 【31】
7月27日・28日 (第2回)【本願寺】		598 【25】
8月1日・2日 (第3回)【本願寺】		743 【24】
8月3日・4日 (第4回)【本願寺】		442 【15】

2017 (平成29) 年度

開催日 【会場】	行事名 【テーマまたは内容】	参加者 【スタッフ】
9月6日～8日 【伝道本部】	2017(平成29)年度 子ども・若者ご縁づくり(キッズ'サガ) 中央連絡協議会スキルアップ研修会(4回目) 【教区マネージャーの役割】	62 【20】
12月9日 【阿弥陀堂】	第25代 専如門主 伝灯奉告法要記念・協賛行事「スクール・ ナーランダ特別編」 【ご縁のない若者層との接点づくり】	600 【15】
12月10日 【阿弥陀堂】	第25代 専如門主 伝灯奉告法要記念・協賛行事「本願寺ギャ ザリング」 【ご縁のある若者層との接点づくり】	581 【15】
12月9日・10日 【本願寺白洲】	第25代 専如門主 伝灯奉告法要記念・協賛行事「ごえんさん エキスポ」 【全国で新しい取り組みに挑戦している浄土真宗本願寺派の お寺、僧侶、団体を一堂に集めて紹介】	7,238 【149】
12月9日 【京都市下京区 京果会館】	全国若手僧侶・寺族門信徒交流会 【全国若手僧侶・寺族門信徒の交流とネットワーク作りとして 交流会】	120 【20】
3月3日・4日 【築地本願寺】	現代版寺子屋 スクール・ナーランダvol.3 東京 【「わたしのため」と「あなたのため」のバランス】	62 【20】

2018 (平成30) 年度

11月19日・20日 【伝道本部】	教区マネージャー・事務担当者研修会(中央連絡協議会) 【ご縁づくりのこれまで、そしてこれから】	112 【15】
1月17日・18日 【聞法会館】	第2期 思春期・若者支援コーディネーター養成研修会(前期) 【思春期・若者の生きづらさについて理解を深め、必要に応じて 専門家へつなぐことのできる思春期・若者支援コーディネー ターの養成】	35 【6】
2月9日・10日 【本願寺・ 伝道院】	現代版寺子屋 スクール・ナーランダvol.4 京都 【十人十色の価値観が表現できる社会を真剣に想像してみる】	107 【25】

■ キッズサンガの始まりから、子ども・若者ご縁づくりに至るまで

キッズサンガの始まり

1961（昭和 36）年 4 月 16 日、第 23 代勝如ご門主様より『親鸞聖人 700 回大遠忌法要御満座の消息』発布を起点として、「門信徒会運動」が提唱されます。

翌年 1962（昭和 37）年度に「あなたの寺を強くせよ」という、門信徒会運動の最初のスローガンが登場します。スローガンは、教団の運動内容や、その時々状況に応じて策定されてきました。1981（昭和 56）年度から「念仏の声を 世界に 子や孫に」となり、幼少年へのご法義伝承の肝要が示されます。このスローガンは 2005（平成 17）年度まで用いられます。

1978（昭和 53）年度より、1989（平成元）年度にかけて取り組まれた「宗門発展計画」の中に、「生涯聞法の体系樹立」があります。用語としては新しいものでしたが、この言葉によって伝えよとすることは、決して新しいことではありません。それは、仏法に遇う機縁を一人ひとりの人生の上で考え、これまで行ってきた組織活動や研修、そのためのテキストなどを、心身の成長段階に応じて関連づけるものでした。

これらの年代経過と呼応するように、教化団体の連盟規約施行日が重なっています。整えられた「規約」をもって、寺院に世代別の単位会が設置されれば、どの年代にあっても「聞法の機会」につながる「居場所」が創出されることとなります。

しかし、「生涯が聞法である」という認識は、教化団体が設立されていなくても、ご法義の伝承に寄与する計画であったと言えます。大切なことは、一人ひとりの人生の上で考えられる、仏法と出会う「はじまり」にあり「つながり」「深まり」にあるといえます。

「親鸞聖人 750 回大遠忌宗門長期振興計画」が始まる、2005（平成 17）年度は、保育連盟（1015 単位）、少年連盟（1705 単位）でした。キッズサンガの企画原案は、「少年連盟」に全面的に協力をいただき策定されました。そのまま「キッズサンガ」の推進に「少年連盟」が関与し続けると、単位会を結成されていない寺院へ願いが伝わりにくくなるのではないかと懸念し、準備段階で関わった「組織教化部」から「宗門長期振興計画推進室 寺院活性化推進部」（いずれも当時の部署名）へ事務所管を移し、「少年連盟」や、少年教化に関わる関係者は協力関係を継続いただきました。「全寺院」で「子どもの居場所」を考えていただく機縁となることを願ったものです。

「寺院活性化推進部」へ事務所管が移る直前、2006（平成 18）年の「宗報」6 月号に「全寺院『子どものつどい』- キッズサンガ - の願い」がまとめられ掲載されています。その後変更された表現もありますが、加筆訂正をせずそのまま紹介しておりますことをご了承ください。当時の表現で「キッズサンガの始まり」についてご理解をいただければと願っています。

合 掌

全寺院「子どものつどい」キッズサンガの願い

2006.04.14

《はじめに》

お寺で、お説教の最中、お母さんに抱っこされて、静かに寝ていたお子さん、突然泣き出してしまいました。機嫌を和ませようとされるのですが、泣き止まず、回りに迷惑をかけまいと、その子は本堂から連れ出されてゆきました。泣き声が遠ざかり、静けさをとりもどした中で、お説教は続けられました。

迷惑をかけないように、法座に連れて行かなくなると、子どもたちはお寺に行く機会が減っていきます。だんだんと、お寺は子どもにとって、縁遠い場所になってしまいます。子どもたちは、いつお寺に行ったら良いのでしょうか。

幼・少年へ、み教えを伝えていくことの大切さは多く語られます。しかし、いつの間にか、大人がお寺を独占していることになってはいないでしょうか。

「お寺で運営される保育園や幼稚園に通園した」とか、「土曜学校・日曜学校や子ども会、スカウト活動に参加したことがある」また、お寺で子ども達がふれあう環境が整えられていれば、お寺にかかわる思い出が残るでしょう。しかし、そのような縁がなければ、いよいよ「お寺が子どもの居場所になっていない」とか、「お寺から子どもの声が聞こえなくなった」という指摘を聞くことになってしまいます。このままでは、「本堂に入ったことがない」どころか、「お寺に行ったことがない」という、ご門徒の子どもたちが成長していきます。かつて、「お寺が風景の一つでした」と語った青年の言葉を思い出します。

そのような現状を打開して、次代を担う青少年の教化育成をさらに推進するため、このたびの親鸞聖人 750 回大遠忌法要を起縁として、お寺で子どもたちを中心とした事業を行ない、一緒に時を過ごすことにより、「子どもの居場所」としてのお寺になることをめざした施策を提案するものです。

《名称について》

そこで、子どもたちの心に最も残るのは、お寺に泊まって時を過ごすことが、何よりも効果的であるという考えから、一泊研修会の意味合いの強い、「サマースクール」という名称を用いて、数年前より準備していましたが、次の点について問題提起がありました。

- ①夏に限定せず、一年間どの時期でも行えるもの
- ②年間の行事に併せても行えるもの
- ③一泊でなくても、一日あるいは半日でも主旨にかなうのでは

などの意見から、この施策の総称として「サマースクール」はふさわしくないのではないかと
の提言により、全寺院「子どものつどい」キッズサンガ（通称：キッズサンガ）の名称が
提唱されるようになりました。

《キッズサンガを開催していただくために》

「キッズサンガ」は年間どの季節であっても、また、「花まつり」「降誕会」など、恒例の
行事にあわせても、開催は充分可能です。日程については、半日でも、一日でも、宿泊を伴っ
ても、その形に制約はありません。お寺に、一歩でも入ることで、伝わっていくメッセージ
は必ずあります。

しかし、「お寺で子どもたちを中心とした行事をしたい」と思っても、「その方法がわから
ない」「若い時と違って、体力がない」「少子化、過疎化の影響で子どもが少ない」「ゲー
ムをしたいけど、やり方がわからない」など、様ざまなご意見を聞きます。そこで、「キッ
ズサンガ」準備の段階から、開催当日に至るまで、課題に答えられるよう解説した「手引書」
を作成し、全寺院へ呼びかけたいと計画しています。

《各教区へ指導者を、各組へ協力者を養成》

この計画は、青少年を教化育成すると同時に、各教区へ青少年育成に係わる指導者「少
年教化アドバイザー」を、各組へは協力者「少年教化サポーター」を養成するものです。

「少年教化アドバイザー」<注1>は、この「キッズサンガ」を、教区内で展開をするため、
中心となって企画・指導の役割を担っていただきたいと願っています。

アドバイザーになるためには、教務所から推薦された方が、「現代の子ども事情」「浄土真
宗の教え」「ゲーム等の技術を身に付ける」の3点を中心に、合計3回の研修会を受講す
ることが必要です。そして、「少年教化アドバイザー名簿」に登録された方を任命いたします。

「少年教化サポーター」<注2>は、各組から2～3名参加願い、教区主催の研修会を受

講していただきます。そして、キッズサンガ開催に向けて、助言・協力を、必要に応じては、直接寺院に出向し、運営やゲーム指導のため、積極的な活躍を期待しています。

少年連盟関係者にとどまらず、他の教化団体や、門徒推進員・寺院役職者・門信徒の方々など、全宗門人の参画をお願いします。

《キッズサンガの願い》

荘厳な法要儀式、静かにお聴聞させていただきご法座、この環境を変えようというのではありません。

キッズサンガでめざすことは、お寺で子どもたちを中心とした事業を行ない、一緒に時を過ごすことによって、お寺には「子どもの居場所がある」ということを示そうとするものです。そのことから、「お寺」での開催を基本としました。組単位での開催よりも、一つの「お寺」を中心として、ご門徒や地域の子どもの参加を得られると、「お寺」に対して、親しみを抱くことにつながるのではないのでしょうか。「全寺院子どものつどい」という「全寺院」の意味合いはここにあります。そして、寺院を構成する多くの方々のご協力・ご参画を得て実施できればと願っています。そのことは「全員聞法」「全員伝道」の姿であり、生涯聞法体系の確立を促すものといえましょう。次代を担う「人」の育成とともに、現代社会が提起する、様々な問題に包まれている子どもたちへ、み教えを伝えていくことを、何よりも大切なことと捉えています。

《教区・組へのお願い》

本施策は、「親鸞聖人 750 回大遠忌宗門長期振興計画」の 27 の推進事項中、23 番目の「青少年教化対策」の中で論じられてきた事項です。具体的な内容については、少年教化の現場に深く関与する組織教化部において、試案を検討し今日にいたっております。

2004（平成 16）年度には、5教区（東北・岐阜・兵庫・備後・鹿児島）の協力のもと、本計画案の試行を実施しました。その総括において、「教区・組の基幹運動推進委員会のかかわりは最も重要である」などの意見がありました。全寺院への広がりをもつため、宗門の重点施策であることを明確にした事業展開を要望する意見が多くあり、同様な意見は各所より提起されています。

全寺院の課題として浸透し、宗門全体の取り組みとしての広がりをもつためには、教区・組の基幹運動推進委員会のご理解無しでは進めることができないことです。

《まとめ》

今の「私」があるのは、多くの方々からお育てをいただいたおかげです。今まで、私自身にかけられた願いを、子どもたちへ、さらには、未来へ向かって伝えていく。大遠忌法要を迎えるにあたり、宗祖が「仏法ひろまれ」と願われたおこころを、キッズサンガを通して、具体的に表すことができればと願っています。

み教えは、人から人へと伝わっていきます。50年後に迎えらる「親鸞聖人 800 回大遠忌法要」の時、このたびの願いが、受け継がれ、キッズサンガによって、ご縁を結ばれ、み教えにであえた方々が、宗門の構成に参画されていることを願ってやみません。

以 上

〈注 1〉 前身は「少年教化推進員」（昭和 55 年 4 月 1 日～）、その後「少年教化アドバイザー」（平成 18 年 1 月 27 日～）、「キッズサンガアドバイザー」「子ども・若者ご縁づくりアドバイザー」と名称変更し、現在は、「子ども・若者ご縁づくり教区マネージャー」。

〈注 2〉 「少年教化 サポーター」（平成 18 年 1 月 27 日～）から「キッズサンガ サポーター」、現在は「子ども・若者ご縁づくり サポーター」。



2018(平成30)年度からの 「子ども・若者ご縁づくり」推進の方向性について

2018(平成30)年『宗報』5月号掲載記事

◎はじめに（「子ども・若者ご縁づくり」の願い）

親鸞聖人ご遷化より750年を超える年月が経過しました。その間、「人」から「人」へ、絶え間なく「み教え」が伝えられたおかげで、いま、私のところへその「み教え」は届いています。「ご縁」をいただくばかりではなく、私から「つなぐ」ことが出来ればとの思いが起きます。今を生きる子ども・若者たちに、阿弥陀さまの願いを伝えることも私たちの役割ではないでしょうか。

宗門が推進しています「子ども・若者ご縁づくり」とは、「み教え」とのご縁をいただいた者が「ご縁」のはじまりのお手伝いをしようというものです。また、その「ご縁」を「つなぎ」「深める」ことに取り組んでいこうとするものです。

そして、その取り組みの先に一人でも多くの子どもや若者に「お寺を居場所」としていただくことを目指しています。それは、単に「お寺を遊び場に」ということではなく、「すべての子どもや若者たちが、阿弥陀如来の願いの中に、心をひらき安らいでいけるお寺になろう」という願いが込められています。

また、子どもや若者たちの寄り添う「ご縁づくり」の取り組みを全国のお寺で僧侶・門信徒が、地域社会との交流の中で実施をしていくことによって、子どもから大人、地域が関わり合う「お寺本来の姿」があらわれてくるのだと思います。

『第25代専如門主伝灯奉告法要』が円成され、「子ども・若者ご縁づくり推進室」が設置されて5年目を迎える今、『親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要』御修行を機縁として、更に子ども・若者層へのご縁づくり推進の歩みを着実に進めていくため、支援体制の現状と課題を正しく認識し、2018(平成30)年度からの「子ども・若者ご縁づくり」推進の方向性を皆様と共有したいと思います。

◎今までの推進体制構築の経緯

2005(平成17)年8月よりスタートした「宗門長期振興計画」の重点項目「次代を担う『人』の育成」に基づき計画・実施された「キッズサンガ」の成果を踏まえ、2014(平成26)年度ご門主様の法統継承を機に「子ども・若者ご縁づくり推進室」を設置しました。また同時に、推進室がご縁づくり活動の推進に必要な事項を協議するために「ご縁づくり活

動推進会議」を設置し、宗門が取り組む「次代を担う人の育成」である「青少年教化」をより総合的・体系的に推進し、全宗門的な取り組みとして展開を図るため、「子ども・若者ご縁づくり基本方針」を定めました。

その方針の中で、あらためて「青少年教化」は子どもや若者世代および寺院、並びに宗門の将来的展望を切り開くための重要な対策であることを確認し、引き続き重点的かつ継続的に活動を推進発展させていくために、取り組むべき重要課題として「(1)阿弥陀さまとのご縁をいただいた子どもたちが、青年になっても引き続きご縁を深めてもらえるような具体策の取組み」と「(2)今まで全くご縁のなかった若者世代を対象とした具体的なお縁づくりの取組み」の2項目を設定しました。

また、近年では社会環境の変化によりライフスタイルや価値観の多様性が進み、少年や青年の置かれている状況が急速に複雑化しており、これからの子どもや若者世代を取り巻く環境に即応した青少年教化を推進するためには、対象者をより具体的にイメージした教化方針と体制を構築する必要が急務であると考えました。そこには宗門に所属する青少年世代の教化だけでなく、あらゆる子ども・若者世代をも視野に入れた教化活動であることを、より鮮明にする意味が込められています。

そこで、あらためて「青少年」を「子ども・若者」、「教化」はまず「ご縁づくり」からと「青少年教化」の意味を捉え直し、宗門の未来を担う「次世代の育成」である青少年教化活動を「子ども・若者ご縁づくり」と総称することを提唱いたしました。

その基本方針に基づき、地域性（各教区の特質）を考慮にいれながら全寺院での子ども・若者を対象としたご縁づくりの企画推進及びその活動支援を展開するために、2016（平成28）年度に「子ども・若者ご縁づくり推進委員会」を宗務所に設置し、各教区に「教区子ども・若者ご縁づくり推進委員会」設置のお願いをさせていただきました。

◎現状の課題と解決にむけて

総括書（宗報2018年3月号）もありますように、「第10回宗勢基本調査報告書」や推進室への実地報告書等によると、現在「教区子ども・若者ご縁づくり推進委員会」は22教区（推進委員会22教区・キッズサンガから継続した委員会6教区・未設置4教区：2018年4月現在）に設置され、「ご縁づくり」の取組み寺院数は4,700ヶ寺を超え

(2017年度)、「宗門がこれまでに示してきた基本的な方針のなかで特に重要だと思うもの」という質問に対し「子ども・若者へのご縁づくりの推進」が54.5%ともっとも高く、大多数の方が、次世代育成の必要性を感じておられる事がわかりました。この調査結果から、今後は現場での「ご縁づくり」のサポートとなり得る事業と、より具体的な提案が求められていくと考えられます。

しかし、それとは反対に「子ども・若者への『み教え』とのご縁をつなぐため活動」（複数回答）という質問に対して「何も行っていない」と回答された方は42.4%、それ以外の57%あまりの寺院で、「その他子どもを主体とした行事」が18.7%、「大人中心の法要・行事への子どもの参加」が18.1%、「2007年に宗派が取り組み始めた『キッズサンガ』」は17.2%と報告されています。そして、「何も行っていない」との回答が50%を超えたのは12教区ありました。これは、次世代育成の必要性は感じながらも、地方性や地域性等、色々な事情で活動を行っていない、または行えない状況である寺院が多いことがうかがえます。また、若者層（中学生・高校生・大学生・専門学生・社会人など）への働きかけが少なく、改めて「誰に」対し「何を」「どのように」して「ご縁づくりの現場を増やしていく」のかを明確にし、それぞれの活動に応じた支援をしていく必要があると考えられます。今後は「教区子ども・若者ご縁づくり推進委員会」、「教区マネージャー」の役割も今一度確認し整理する作業が必要かもしれません。

また、宗報2016年11・12月合併号にも掲載されましたように若者を視野に入れた「ご縁づくり」に取り組むため、名称を「キッズサンガ」から「子ども・若者ご縁づくり」に変更したことを分かりやすく伝え得なかったことや、次々と新たな言葉が出てくる印象を与えてしまったことで現場を少々混乱させてしまったことは否めません。現在も各協議会で趣旨などを引き続きお伝えしておりますが、いまだ宗門全体の周知には至っておらず、情報の積極的な「見える化」を進め、分かりにくい名称を整理することで対応していきたいと考えています。

その他にも、「ご縁づくり」のイメージが宗門内に限定している感があり、基本方針で提唱された「あらゆる子ども・若者世代」が対象になっておらず、この活動が宗門内で留まっていることも、各報告書から感じ取れます。

◎2018（平成 30）年度「子ども・若者ご縁づくり」推進の重点項目

子ども・若者層への「ご縁づくりの現場」は、この活動に取り組むお一人おひとりが行動を起こされる所にあります。また、その現場を支援するために「子ども・若者ご縁づくり推進室」は、「①『ご縁づくりの現場』が一つでも多くなるような支援の推進」、「②多様化する子どもや若者世代の現状を学ぶと共に、彼らの『今』を支え、阿弥陀さまとの『ご縁づくり』をしていくことを目的とした、事業の企画や研究の発表」の 2 点を大きな柱とし、宗門のご縁づくり活動の方向性を打ち出していく事を役割としています。

上記の役割を明確にし、前項の課題を解決するために、2018（平成 30）年度より以下の 5 点を重点的かつ継続的に推進発展させてまいりたいと思います。

- (1) 組織体制の見直しと強化
- (2) 人材の発掘と成長の支援
- (3) 対象を分けた「ご縁づくり」推進の強化
- (4) 時代に即した広報活動の推進
- (5) 各教化団体との連携

(1)・(2) についてですが、「教区子ども・若者ご縁づくり推進委員会」の全教区設置を目指し、引続き各教区においてご尽力をいただくようお願いをしております。また、教区事情を鑑みながら組織の機能面より「ご縁づくり」を推進していく「教区子ども・若者ご縁づくり推進委員会」や、各教区へご縁づくりの浸透を図る役割をもつ「教区マネージャー」についても今一度役割について認識を新たに、各組のサポーターも含めた研修を開催する必要もあると思います。また「ごえんさんエキスポ」でも紹介されましたように、全国各地で気軽に仏教とふれあえるような様ざまな取り組みを行う活動がみられます。活動に取り組むもの同士の出会いの場を作り出すことも重要になってきていると感じています。

(3) については、「子ども・若者ご縁づくり基本方針」に定められた「(1)阿弥陀さまのご縁をいただいた子どもたちが、青年になっても引き続きご縁を深めてもらえるような具体策の取組み」として、現在、施策が十分ではない中高生を対象としたご縁づくりについて様ざまなアイデアを出し合い、準備を行うような推進体制を整えてまいります。

(4) については、ホームページを含め若者世代を中心とした現代的なコミュニケーションスタイルである、LINE、Facebook、Instagram などの SNS（ソーシャル・ネットワー

キング・サービス) を活用した情報発信やコミュニケーションづくりを行い、ダイレクトに「み教え」を届けることの出来る広報機能の体制強化を整備していきたいと思いを。

(5) についてですが、2007年にキッズサンガを提唱し「初めての一步として、大遠忌までに子どもを視野に入れた寺院活動を始めましょう」と仏教婦人会や仏教壮年会の方々に呼びかけた結果、「第9回宗勢基本調査(2008年度)」において、寺院の教化団体が活発に活動している率が向上しており、教化団体が相互に連携する事により各団体が相乗効果が期待できると思われます。各団体の連絡協議会を開催し、より強固な連携を目指し協議を進めたいと思いを。

◎おわりに(すべての原点は「信頼関係が土台にあること」)

子ども・若者ご縁づくり推進室は、「子ども・若者ご縁づくり」の名称のもと、日本国内はもとより世界の子ども・若者たちが、阿弥陀さまのご縁に会い、今も将来も親鸞聖人の教えに親しみ、聴聞の座に連なる「人」となり、自他ともに心豊かに生きていくことのできる社会の実現に向け、努力する歩みを進めていただくことを願い、様々な具体的施策に取り組んでまいります。

寺院活動から分かるように、教化活動は人との繋がりに依って成り立っています。ですので「一人ひとりとの関係性の構築」が非常に重要です。そして、その関係性は「信頼」が成り立たせます。私達のご縁づくりの現場に関わる教区・組・寺院、一人ひとりと信頼関係を結ぶことを大切に、またご意見をいただきながら全宗門的な取り組みとして展開することを目的に設定したうえで、具体的な施策を推進していきたいと考えています。

仏縁の多くは地域や家庭によってもたらされていましたが、現代ではおよそ宗教的な伝承が困難な状況です。また、人口減少や過疎化の進行による問題等、宗門を取り巻く環境は大きく変化しています。しかし、環境は変化しても宗門の未来を担う人材の育成が最重要課題であることは今も昔も変わりはありません。ともに、子どもや若者世代の現状を学び、彼らの「今」を支え、阿弥陀さまとの「ご縁づくり」を推進してまいりましょう。

子ども・若者ご縁づくり推進室長
浄土真宗本願寺派副総務
弘中 貴之

2019(令和元)年度より 活動方針・事業計画の標記方法を整理しました ので、参考として以下の通り掲載いたします。

1. 目的

親鸞聖人のみ教えのもと「あらゆる人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝え、もって自他共に心豊かに生きることのできる社会」の実現に貢献することを「子ども・若者ご縁づくり」はめざします。

2. 活動理念

キッズサンガの理念を継承し、「ご縁づくり」は「教化活動」との共通認識のもと、宗門を構成するすべての人が、子ども・若者層を対象に、あらゆる団体・知識・経験・人材とつながり、一人ひとりが自分にできる「阿弥陀さまのご縁に共に遇い得る活動」を行うことで「お寺を居場所」と感じてもらい「手を合わせ、お念仏申す人」となってもらおう。

3. 活動テーマ

「次世代へのご縁づくりをみんなで～ご縁をつくり・つなぎ・深める～」

※2019年度 子ども・若者ご縁づくり推進にかかる活動方針・事業計画書より一抜粋



「私たちのちかい」についての親教

私は伝灯奉告法要の初日に「念仏者の生き方」と題して、大智大悲からなる阿弥陀如来のお心をいただいた私たちが、この現実社会でどのように生きていくのかということについて、詳しく述べさせていただきました。このたび「念仏者の生き方」を皆様により親しみ、理解していただきたいという思いから、その肝要を「私たちのちかい」として次の四カ条にまとめました。

わたし 私たちのちかい

ひとつ じぶん から と
一、自分の殻に閉じこもることなく
おだ やかな かお やさ こと ぼ たい せつ
穏やかな顔と優しい言葉を大切にします
ほほ え かた ほとけ
微笑み語りかける仏さまのように

ひとつ なが
一、むさぼり、いかり、おろかさに流されず
しなやかな心と振る舞いを心がけます
こころ やす ほとけ
心安らかな仏さまのように

ひとつ じぶん だい じ
一、自分だけを大事にすることなく
ひと よろこ かな しみ を わ 分かち合います
じ ひ み ほとけ
慈悲に満ちみちた仏さまのように

ひとつ い き
一、生かされていることに気づき
ひ び せい いっ ぱい
日々に精一杯つとめます
ひと すく つ ほとけ
人びとの救いに尽くす仏さまのように

この「私たちのちかい」は、特に若い人の宗教離れが盛んに言われております今日、中学生や高校生、大学生をはじめとして、これまで仏教や浄土真宗のみ教えにあまり親しみのなかった方々にも、さまざまな機会で唱和していただきたいと思っております。そして、先人の方々が大切に受け継いでこられた浄土真宗のみ教えを、これからも広く伝えていくことが後に続く私たちの使命であることを心に刻み、お念仏申す道を歩んでまいりましょう。

2018(平成30)年11月23日

浄土真宗本願寺派門主 大谷光淳

《編集・発行》

〒600-8358 京都市下京区堀川通花屋町下ル
TEL 075-371-5181 Fax 075-351-1211

子ども・若者ご縁づくり推進室

<http://kids-sangha.hongwanji.or.jp/>
E-mail : goen@hongwanji.or.jp

2020（令和2）年3月10日発行